

【研究論文】

1992年の「精神薄弱」用語問題:

議論の端緒・伊藤隆二(1990)『障害児』から『啓発児』へ—今まさに転回のとき—を中心に

《Original Article》

Argument About the Terminology Problem of "Mental Deficiency"  
in 1992.

鶴田一郎

Ichiro TSURUTA

『広島国際大学 教職教室 教育論叢』

“*Hiroshima International University Journal of Educational Research*”

ISSN:1884-9482

第11号 抜刷

Off Print of the 11<sup>th</sup> Edition

広島国際大学 教職教室

Issued by Hiroshima International University Teacher Education Unit

2019年12月

December, 2019

## 1992年の「精神薄弱」用語問題:

議論の端緒・伊藤隆二(1990)『『障害児』から『啓発児』へ—今まさに転回するとき—』を中心に

広島国際大学 教職教室 鶴田 一郎

要旨: 知的ハンディキャップを持つ人を、どう呼称するかは、現在に至るまで議論が途絶えることが無い。それは、どのような「用語」を用いても変わらない。本研究では、筆者の師である伊藤隆二教授が提唱している『『障害児』から『啓発児』へ』の思想を研究の出発点とする。近江学園の創立者・糸賀一雄氏は「この子らを世の光に」と言われたが、伊藤教授は、それを更に進めて「この子らは世の光なり」と主張される。なぜ「この子らは世の光なり」なのか、また、なぜ「障害児」ではなく「啓発児」なのか、ということの本研究は解き明かしたい。その際、1992年に特に集中した「精神薄弱」用語問題に関する議論を中心に考察を進めるのだが、今回は、まず、その契機となった論文・伊藤隆二(1990)『『障害児』から『啓発児』へ—今まさに転回するとき—』に焦点を当てて検討した。その結果、知的ハンディキャップのある「この子ら」は、その「弱さ」ゆえに神に選ばれた存在であり、その「弱さ」ゆえに神の光を、そのまま受け容れ、自らが「世の光」となる。「この子ら」の光を身に受けた眼の前が曇っていた「強者」の内、目覚めた者は、己の至らなさを自覚し、正しくものを見ることに覚醒し、自ら低きに視点を移して正しく生きるようになる。そのような人が一人でも増える社会が達成されれば、「この子ら」は「障害児」ではなく「啓発児」と呼ばれるのが相応しいということになるのであることが明白になった。

### はじめに—問題の所在—

特別支援教育に関する内外の歴史研究は興隆を見せている。それは教育方法論や実践論に加えて、歴史的社会的文脈における特別支援教育の在り方が重視されてきているからである。その際、研究に用いられる用語、特に知的ハンディキャップを持つ人々を、どう呼ぶかは、いつの時代でも議論の的であったのにもかかわらず、いつの間にか忘れられる。現在は「知的障害」あるいは「精神遅滞」で統一されたかに思われるが、それにも問題がないわけではない。1980年代までは「精神薄弱」が使われていた。それでは、なぜ現在は「知的障害」「精神遅滞」で統一されているのか。その謎を解く鍵は1992年に知的ハンディキャップに関する研究団体・支援団体などが行った「精神薄弱」用語問題に関する議論にある。そこで本研究では1992年の「精神薄弱」用語問題の議論を中心として、その前後のみならず、現在までの、この問題についての検討を背景に、今後、この議論を深めていく際の客観的な「たたき台」を提示しようと思う。なお、今回は、まず、1992年の「精神薄弱」用語問題の議論の興隆の契機となった論文・伊藤隆二(1990a)『『障害児』から『啓発児』へ—

今まさに転回するとき—』を中心に検討する。

## 1. 伊藤論文(1990a)と、その反響

本節では、まず今回の検討の対象である伊藤論文(1990a)を全文引用し提示した上で、その論文の反響について、大熊(1992)を参照しながら考察していきたい。

### 1.1 伊藤論文(1990a)

「障害児」から「啓発児」へ—今まさに転回するとき—

横浜市立大学教授[現在、横浜市立大学名誉教授——引用者、以下同じ] 伊藤隆二

#### 1. 名は体を表す

「名は体<sup>たい</sup>を表す」といいます。私たちが長い間、使ってきた「障害児」「障害者」から「よいイメージ」を思い浮かべる人はほとんどいません。なぜならば「障害」は「妨害」とか、「邪魔」とか「あってはならないもの」<sup>あらわ</sup>を表しているからです。

近くの駐車場には「車の通行にとって障害となるものは撤去します」という表示が出ていて、私は毎朝、毎夕そこを通るたびにイヤな気持ちになります。そのイヤな「障害」という二文字をなぜ人間の形容詞に使わねばならないのでしょうか。

ある小学校の教師が『『害』は人びとにとってよくないものをいうときに使います。例えば害虫、害鳥がそうです。ほかに何かあるでしょうか』と子どもたちに質問したところ、多数の子どもたちが「障害児」と答えた、という話を聞きました。

みなさんも「害」のつく言葉<sup>たくさん</sup>を沢山あげることができるでしょう。「水害」「公害」「災害」「危害」「冷害」「迫害」「毒害」「侵害」「殺害」「傷害」「損害」「弊害<sup>へいがい</sup>」「害悪」などなどです。

ものの本によりますと、この「害」は動詞では「そこなう」と読み、「傷つく」「切り裂く」「打ち割る」「破る」「妨<sup>さまた</sup>ぐ」「憎む<sup>い</sup>」「忌む」といった意味を含んでいる、とあります。また名詞では「災難」「妨<sup>さまた</sup>げ」「不利」「災禍」などと同じ意味だと説明されています。いずれにせよ、「害」は破壊的で人びとの生活にとってマイナスになるということを表しているのです。

#### 2. 私は猛省する

「障害」という表記が、いつ、だれによってなされたかは知りませんが、古い書物を見ると「障礙<sup>がいがい</sup>」「障<sup>が</sup>碍<sup>がい</sup>」という漢字が使われていたことがわかります。「障」も「礙」も「さしつかえる」「さまたげる」という意味ですから、肉体上、あるいは精神的働きの面で、何か損傷を受けた人が、この社会での生活、学習、勤労などの面で「さしつかえている<sup>さまた</sup>（妨<sup>さまた</sup>げられている）」場合を「障礙」「障碍」というのは不都合ではないかもしれま

せん。しかし、「礙」「碍」が当用漢字にないからといって、いきなり「害」をあて、それ以来「障害児」「障害者」がひろがってしまったというのは、あまりに安易であったし、無神経のそしりはまぬがれないでしょう。

私自身、その無神経な一人であったのであり、弁解の余地がないわけですが、今この段に来て、<sup>もうせい</sup> <sup>く</sup>猛省し、悔い<sup>あらた</sup>改めようと決意しているので読者のみなさんのご賛同を得たいのです。

ときあたかも私どもの『誕生日ありがとう運動』をはじめて 25 年、この「運動のしおり」も第 101 号になり、ここを一つの「<sup>ふしめ</sup>節目」として、「障害児」「障害者」の改名をよびかけようと、思ったわけであります。

この運動に参加した私どもは、初めからこの子らについて誤解し、いわれのない差別感や偏見をもっている人たちに、一人でも多く正しい理解者になっていただきたいという願いを抱き続けていました。にもかかわらず私ども自身、「障害児」「障害者」という言葉を使っていたのですから、<sup>まっさき</sup> <sup>きゆうだん</sup>真っ先に糾弾されなければならないのは私どもなのです。とくに私は人の数倍も苦い薬を飲まねばならないと思っています。

### 3. 言葉は意識を変える

先日、たまたまある出版社の編集室にいたとき、編集者の一人が電話で、だれかに「障害児」という漢字を教えているのを聞きました。

『障害』の障はジャマスルの障。それ、故障という漢字があるでしょ。その障。こわれて使いものにならないということ。害は有害の害。そう、害毒の害。害毒を流す、というでしょ。人間にとって罪なものですよ。」

その編集者が、今、せっせと『障害児の育成』というタイトルの本を作っているのですから、なんとも奇妙ではありませんか。

名や表記を変えるだけではダメだ、大事なはこの子らへの<sup>べっし</sup>蔑視を改め、その人権を守るという意識革命だよ、という人もいます。私もその人の意見に賛成しないわけではありません。かつてこの子らは「人類の廃棄物」「社会の妨害者」「<sup>ふうてんはくち</sup>廢人」「<sup>ふうてんはくち</sup>瘋癲白痴」「低能児」「問題児」「能なし」「知能欠陥児」などと呼ばれていました。それらの言葉を使っていた当時の人びとは、この子らを、実際に、字義通りに見ていたのだらうし、かつ邪魔者として扱っていたのです。

しかし、人びとの意識が変わるとともに、この子らの表記も変わっていきました。いえ、これはあべこべだったというべきでしょう。この子らの表記を変えることで、人びとのこの子らへの目も意識も態度も変わっていったというのが正しいと私は思っています。

「低能児」に代わって「<sup>せいしんはくじゃく</sup>精神薄弱児」とか「<sup>せいしんちたい</sup>精神遲滞児」が登場してきました。しかし、薄弱からも遲滞からもよいイメージが浮かべられないということで、あたりのいい「ちえおくれ」が使われ出しました。精神は全人格を表示する言葉であったとするならば、精神薄弱（<sup>せいはいく</sup>精薄と略された）はどうしても全人格の欠陥がイメージされることが避けられませんでした。

### 4. 「ちえおくれ」も問題

その点「ちえおくれ」は知的ハンディキャップを強調するというので受け入れられやすかったともいえます。

しかし、今ここに来て、私は「ちえおくれ」も変えなければならないと、真剣に思っているところです。「知恵」はキリスト教でも仏教でもきわめて重要な概念であり、それを知らずに、いとも簡単に「ちえおくれ」といってしまうのは大問題だからです。もちろん「おくれ」も差別語です。この子ら一人ひとりそれぞれに独

自的な存在であり、それぞれの違いは個性をあらわしているのもあって、それを無視し、一括して「おくれ」というのは侮蔑語ぶべつご以外の何ものでもないからです。

ともあれ、名や表記を変えるだけではダメだというのは確かですが、だからといって悪いイメージしか与えない言葉を使い続けていいとはいえません。これからは「イメージ時代」と言われているだけに「障害児」「障害者」という言葉はいつそう気になります。

「障害」は英語ではハンディキャップという言葉に相当するようですから、「知力の障害」は、「知力のハンディキャップ」と和洋語にになってしまう手もあります。「障害」を社会にとって「さしつかえ、有害である」のではなく、社会の側からそれを背負わされている、というように逆転すれば、この子らは「ハンディキャップを負わされている子どもたち」というのが正しいでしょう。日本語でいえば「障害をもつ子」ではなく、「障害を受けている子」ということです。

それにしても「障害」という二文字はどうしてもいただけません。「ハンディキャップ」とカタカナにするのも妙案ですが、長すぎますし、すでに「ハンディキャップ」イコール「障害」という公式が人びとの頭に定着してしまっていますので、今後は使用にたえないでしょう。

## 5. この子らは「啓発児」なり

そこで私は「この子らは世の光なり」という思想に立脚し、かつこの子らが人びとを啓発し、新しい社会つくを創る主人公である、という信念から、この子らを「啓発児」と呼ぶことを提唱したいのです。

したがって、この子らの教育をこれまでは「特殊教育」とか「障害児教育」といっていましたが、今後は「啓発教育」と呼ばれることになります。この子らの養護学校は今後は「啓発学校」になります。

さらにこまかく見ていくなれば、盲教育もうは啓視教育、盲学校は啓視学校、聾教育ろうは啓聴教育、聾学校は啓聴学校と呼びかえられることになります。知力ハンディキャップの子どもの教育（かつては精薄教育といわれていた）は啓知教育、この子らの学校は啓知学校と呼びかえられることになります。

盲児は啓視児、聾児は啓聴児、「ちえおくれの子」は啓知児と呼ばれるようになれば、人びとのイメージも明るくなるでしょうし、未来に向かって希望を抱くことにもなるでしょう。

「啓発」は、もともと無知蒙昧むちもうまいな状態をひらいていく、という意味であり、それは「先見の明」の人のすることと思われていました。そういう人は見識のある、いわゆる偉い人というイメージがありましたが、私は今、この世は知力のつよい者、貪欲どんよくな者、要領のよい者によってほとんど完全に支配され、破滅の道をまっしぐらに突き進んでいるように思えてならないのです。明日の社会をひらくのは偉い人ではなく、知力は弱い、悪事には無縁で、ただ純粋に、清らかに生き、人びとに生きる希望や喜びを与え続けているこの子ら以外にはいない、と私は確信しています。私のこの確信の根拠については『この子らは世の光なり』（樹心社）【伊藤 1988】でも述べましたが、まもなく樹心社から上梓じょうしされる『なぜ「この子らは世の光なり」か』（仮タイトル）【伊藤 1990b】という拙著せつちよでくわしく述べています。

「障害児」ではなく「啓発児」に、「障害教育」ではなく「啓発教育」に、「障害福祉」ではなく「啓発福祉」にかえることに賛同してくださる方が一人でも多くなることを心から願っています。 (1990年1月)

『誕生日ありがとう運動のしおり』増刊101号（1990年2月発行）から転載 (伊藤 1990a)

なお、上に引用した「しおり」を発行している「誕生日ありがとう運動」は、神戸市公立学校教員であった藤本隆氏が 1965 年に発足したボランティア団体で、「この子ら」（「啓発児ら」）を正しく理解し支援する輪を広げる活動を行っている。伊藤隆二も初期の段階から、この活動に参画している。活動資金は、活動に共感される市井の老若男女が 1 年に 1 回の誕生日に、生かされている自分を深く見つめ、それに「ありがとう」と感謝しながら、浄財を 100 円寄付する、ということが主体となっている（藤本・松岡・奥秋 2010）。伊藤によれば 1990 年代の段階で寄付は 1 億円を超えていたということである。

## 1.2 その反響

大熊(1992)を検討すると、上の論文(伊藤 1990a)の影響は「精神薄弱御四家」と呼ばれる 4 つの団体に顕著に表れているという。その 4 つの団体の連合体が 1974 年 10 月に結成された「日本精神薄弱福祉連盟」であり、その後 1998 年 7 月に「日本知的障害福祉連盟」と改称、更に 2006 年に「公益社団法人 日本発達障害福祉連盟」に再改称されたものである。以下、4 つの団体に注目して伊藤論文の影響を特に 1992 年の「精神薄弱」用語問題に焦点を当ててまとめたいと思う。なお、波線は伊藤論文の影響が直接あるいは間接にあったものを指す。

### 1.2.1 「研究者の集まり」

機関名の変更： 1966 年 7 月設立「日本精神薄弱研究協会」

→1992 年改称「日本発達障害学会」

機関誌名の変更： 1967 年発刊『日本精神薄弱研究協会会誌』

→1979 年改称『発達障害研究』

1992 年の「精神薄弱」用語問題の議論：

『発達障害研究』1992 年 第 14 卷 第 1 号 特集「精神薄弱」用語問題を考える

### 1.2.2 「施設関係者の集まり」

機関名の変更： 1934 年設立「日本精神薄弱者愛護協会」

→1999 年改称「日本知的障害者福祉協会」

機関誌名の変更： 1954 年発刊『愛護』

→1992 年 4 月改称『AIGO』

→2002 年 4 月改称『さぼーと』

1992 年の「精神薄弱」用語問題の議論：

『AIGO』1992 年 第 39 卷第 5 号 [5 月の特集] 再考“精神薄弱”の呼称と人権Ⅰ—国内の動向—

『AIGO』1992 年 第 39 卷第 6 号 [6 月の特集] 再考“精神薄弱”の呼称と人権Ⅱ—海外の動向—

『AIGO』1992 年 第 39 卷第 7 号 [7 月の特集] 再考“精神薄弱”の呼称と人権Ⅲ—それぞれの施設で—

### 1.2.3 「教育関係者の集まり」

機関名の変更：1949年設立「特殊教育研究連盟」

→1953年改称「全日本特殊教育研究連盟」

→2006年改称「全日本特別支援教育研究連盟」

機関誌名の変更：1950年発刊『児童心理と精神衛生』

→1956年改称『精神薄弱児研究』

→1985年改称『発達の遅れと教育』

→2006年改称『特別支援教育研究』

1992年の「精神薄弱」用語問題の議論：

『発達の遅れと教育』1992年第415号 特集一人権と用語問題

### 1.2.4 「親たちの会」

機関名の変更：1952年設立「精神薄弱児育成会」(別名：「手をつなぐ親の会」)

→1955年改称「全国精神薄弱者育成会」

→1959年改称「全日本精神薄弱者育成会」

→1995年改称「全日本手をつなぐ育成会」

機関誌名の変更：1956年発刊『手をつなぐ親たち』

→1993年4月改称『手をつなぐ』

1992年の「精神薄弱」用語問題の議論：

『手をつなぐ親たち』1992年7月号 「用語」改称の呼びかけ

### 1.2.5 「障害」という言葉は残った

以上の4つの団体が所属する「精神薄弱福祉連盟」、後の「知的障害福祉連盟」→「日本発達障害福祉連盟」が、なかなか「精神薄弱」という言葉を廃止できなかった経緯は有馬正高ありまきたかにより以下のように紹介されている。

#### 有馬先生

精神薄弱という言葉が福祉連盟[「精神薄弱福祉連盟」→「知的障害福祉連盟」→「日本発達障害福祉連盟」——引用者、以下同じ]がやめようっていったのはかなり早い時期でした。しかし、このような変更を厚生省(当時)が全部ストップさせたのです。厚生省(当時)の認可団体なので、本省のほうはまだ法律の改正をいろいろと考えている最中という理由です。法律が通るまで待ってくれということでした。そういうことで、福祉連盟の名称変更は滞とどこおったのです。法律が改正された[1998年=岩井1999]ので、申請としては知的発達障害と出したのですが、知的障害として、発達を除いてもいいという考えがあったのは、国際研究協会[「日本精神薄弱研究協会」は「国際精神薄弱研究協会」の要請により設立された経緯がある]がID[Intellectual Disabilities：知的障害]とつけて[「国際知的障害研究協会」と改称]、DD[Developmental Disabilities：発達障害]としなかつ

たためでしょう。ID で統一したということがありました。

[有馬・原・池田 2010, p.477]

いずれにせよ「精神薄弱」は「知的障害」と呼ばれるようになったのだが、それでも「知的障害」つまり「障害」の文字は残った。伊藤隆二の提案した「啓発児」は採用されなかった。また現在に至っても採用されていない。

## 2. なぜ「障害児」から「啓発児」なのか

本節では、キリスト教信仰を基盤とする伊藤隆二の教育思想が集約的に表現されていると思われる NHK 教育テレビの番組の中での伊藤の発言を引用しつつ、なぜ「障害児」から「啓発児」なのか、について考察を深めたい。なお、その番組とは、平成 8 年[1996 年]4 月 7 日に放送された NHK 教育テレビ『こころの時代～宗教・人生～』「この子らに啓発されて」(話し手：伊藤隆二、聞き手：かねみつとしお金光寿郎)であり、その番組を HP 上に「逐語録」として掲載したもの[伊藤・金光 1996]を参照・引用した。

### 2.1 「神の選び」

金光[寿郎=聞き手——引用者、以下同じ]：

そうですね。

非常に強い言葉でおっしゃっているところですが、これも読まして頂いただきますと、

神は、知者をはずかしめるために、

この世の愚おろかな者を選び、

強い者をはずかしめるために、

この世の弱い者を選び、

有力な者を無力な者にするために、

この世で身分の低い者や軽かろんじられている者、

すなわち、無きに等しい者を、

あえて選ばれたのである。

それは、どんな人間でも、

神のみまえに誇るがないためである。

(コリント人への第一の手紙 一章 二十七から二十九節)

コリントの第一の手紙ですね。



伊藤[隆二=話し手]：この聖書の御言葉に、私達が今読まして貰いますとですね、びっくりするような言葉、例えば、「愚かなる者」とか、それから「無きに等しい者」というような言葉がありますね。これは「神様があえてこの世にもたらしたのだ」と。〈何故もたらしたのかという、その答え〉なんですね。そうすると、〈自分は頭が優秀である〉とか、或いは〈力がある〉とか、〈地位がある〉とかですね、そう思っている人達、現代人というのは、そういうものを求めて、凄<sup>すご</sup>い勢いで走り回っているわけですけれどね。「頑張る」という言葉よく使われるのは、先ず、〈そういうものを求めている〉んだらうと思うんですが、〈ちょっと待ちなさい〉と。〈そうではないのだ〉という。〈そういう生き方としている人は、実はとっても間違っただこと〉をしている。〈恥ずかしい思いをさせる為<sup>ため</sup>に〉というようなことを言っているんですけどね。なかなか分かってくれない。〈分かってくれないもんだから、こういう子供達をあえて選んで、この世にもたらして下さ<sup>くだ</sup>っているんだ〉ということなんですね。その教えを私達はやはりしっかりと受け止めないとですね、とんでもない方向に行きそうな感じがするんですね。実際、この子供達は兵器を作ったり、悪さをしてですね、人を困らすというようなことは全<sup>まった</sup>くしませんね。自分のペースで精一杯生きているんですが、しかし人を騙<sup>だま</sup>したり、苦しめたりということをしてない。知的に優秀であるとか、有力であるとか、地位が高いという人ほど、実は人を苦しめるようなことをしているという面が多いわけですね。

[伊藤・金光 1996, p.11]

神は、この世を救済する御業の協力者として「愚かな者」「弱い者」「身分の低い者」「軽んじられている者」「無きに等しい者」[以下「前者」]を「あえて」選ばれた。決して「知者」「強い者」「有力な者」[以下「後者」]は選ばれなかった。それどころか、神は「前者」を選ぶ目的を、「後者」を「はずかしめるため」「無力な者にするため」と言い切っている。これは「前者」を通じた救済と解放の御業が達成される時、それが「後者」のような人々の力や技で成し遂げられたものではなく、神そのものの御業であることを明確に示すためである。もちろん「この子ら」は「前者」である。なぜなら「神のみまえに誇ることがないためである」。もっと言うならば、「この子ら」は神が創造された「この世」を決して汚<sup>けが</sup>すことがないからである。一方、「後者」は自分の能力や業績や身分や財産を「誇り」、中には「この世」自体の崩壊につながるような「大量破壊兵器」を生み出す人もいる。上の引用中の伊藤の発言は「あなたは『後者』のように驕<sup>おご</sup>り高ぶって『前者』の人を下に見る人間になりたいですか。それとも『この子ら』に代表される『前者』のように神の使徒として『この世』の救済と解放の協力者として生きていきますか」という我々健常者とと言われる人々に伊藤隆二が究極の問いを突き付けていることになるのである。

## 2.2 「最も小さい者」

金光：これもよく聞く言葉でございますが、ちょっと読まして頂きますと、

あなたがたによく言うておく。

わたしの兄弟であるこれらの

最も小さい者のひとりにしたのは、

すなわち、わたしにしたのである。

(マタイによる福音書 二十五章 四十節)

「わたしの兄弟である」。

伊藤： そうなんですネ。

金光： これらの「最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」。マタイ福音書の二十五章の言葉ですが。

伊藤： キリストの御言葉にはよくこの「兄弟」という言葉があるんですが、これは〈分け隔てのない皆平等な存在だ〉という意味があるんですネ。しかしその中では〈最も小さい者〉と言うのは、もともとギリシャ語で書かれた聖書なんですが、ギリシャ語の小さいという意味には、単に〈年齢が若い〉とか、<sup>ある</sup>或いは〈身体が小さい〉という意味だけじゃなくって、〈<sup>しいた</sup>虐げられている〉という意味もあるんですネ。〈知恵が低い〉という、〈<sup>さ</sup>見下げられている〉という、そういう意味もこの小さいという言葉の中にあるんですネ。そういう人に対して何か、何か出来ることがあるならばして欲しいと。そのことは結局はこの聖書にありますように、それは、「わたしにしたことである」。これはキリストのご自身のことをおっしゃっているんですが、「最も小さい者のひとりに、何か出来ることがあってすることは、実はそれはわたしにしてくれたことなのだ」という。こういう言葉なんですネ。そうすると、キリストに<sup>つか</sup>仕えて、キリストを信じて、どこまでも<sup>すが</sup>縋って生きようとするならば、具体的には、何をしなければいけないかという。「最も小さい者にすること」なのだというその気付きだったんですネ。ただこれもですネ。〈私が強いものとして、小さきものに何かをして上げる〉ことかという、これは違うんですネ。私自身が〈最も小さきもの〉なんですネ。色んな意味で、〈この私自身が救われていると。いろいろな人によって生かされている。そうすると、私もまた小さきもの一人として、色んな恩恵を受けている〉という発見をしたわけですね。そうすると、ここでいう〈最も小さい者のひとりというのは、私と同格〉なんですネ。そういう発見をして行っている中ですね、〈この子供達に教えられることが実に多いなあ〉ということの後で気が付きましたね。 [伊藤・金光 1996, p.9]

聖書による「最も小さい者」とは、神が選ばれた「世の無学な者」「世の無に等しい者」「身分の卑しい者」「<sup>み</sup>見下げられている者」(コリントの信徒への手紙一 第 1 章 第 27 節—第 28 節—以下、聖書からの引用は新共同訳『聖書』(1987)による)であるが、より具体的には、子ども、女性、病気の人、障害のある人、飢えている人、身体を売る人、罪人、奴隷、取税人、羊飼いや豚飼いやなどの牧畜人、行商人、小売り商人、<sup>ひやと</sup>日雇い労働者、門番・女中・給仕などの奉公人、サマリア人、異邦人などを指す(滝澤 1997)。それらの人々は、才能、財産、地位、教養もなく、強い者から、<sup>うと</sup>疎んじられ、<sup>さげす</sup>蔑まれ、<sup>しいた</sup>虐げられ、痛みつけられ、押し潰されていて、いわば一見、自分の内にも外にも自分を<sup>まも</sup>衛る力を見出せない人々である。

「人の子」イエスは、父親がはっきりしない母マリアの子として生まれ、父ヨセフは、その批判

に耐えながら生きた。そしてイエスは「石工」として生きていた。「石工」は現在の「大工」とは異なる職業差別を受けていた人々である。すなわち、イエスも「最も小さい者」であった。そして同胞ユダヤ人律法学者に疎まれローマ帝国の名のもとに十字架刑を受ける。その末期の際「アッパ」（ヘブライ語・アラム語の「お父さん」と叫びながら、この世のすべての罪を背負って死んでいくイエスは「神の子」となる。「人の子」であり「神の子」であるイエス＝キリストの誕生である。「神人」イエスは「最も小さい者」の筆頭であり導き手でもある。処刑から3日後「復活」されたイエスは天上に昇られ「最も小さい者」の守護者となられた。

「この子ら」は「最も小さい者」である。そして我々も「最も小さい者」である。「神の似像」(imago Dei)として創造された我々人間は神から授けられた本来の「善」という側面だけでなく、「被造物」としての限界から「悪」の誘惑を逃れることができない側面も持つ。すなわち生まれながらに「原罪」を背負っているのである。したがって、すべての人が「最も小さい者」なのである。しかし、聖母マリアが「無原罪の聖母」と呼ばれるように、「この子ら」は人間の中では最も「無原罪」に近い。それに倣い、我々健常者も自分の身を低くして「最も小さい者」＝「この子ら」と連帯することを伊藤隆二は主張しているのである。

そのためには本田哲郎神父(2001)の「メタノイア」の考え方が最も参考になる。本田神父は大阪の日雇い労働者の町である“釜ヶ崎”で支援活動を行うカトリックの神父である。メタノイアとはふつう「悔い改め」「回心」などと翻訳されてきているが、本来は「視点の転換」(本田 2001, p.16)を意味する言葉であり、ギリシャ語新約聖書原典の文脈から言うと「低みに立って見直す」(本田 2001, p.17)ということを目指す。

「低みに立って見直す」と言っても本田神父も最初、誤解していたように「日雇い労働者」＝「最も小さい者」と同じ生活をするということではない(本田 2006, pp.50-55)。そうではなく「視点を低くもつ」すなわち「日雇い労働者の目線に立って考え行動する」という点に本田神父は気づかれた。正に「低みに立つ」＝「下に立つ」(understand)は「最も小さい者」を「理解する」(understand)ことから出発する。そうならば「最も小さい者」＝「この子ら」を「上から目線」で見下したり、蔑んだり、虐待したりということとはなくなる。この「メタノイア」の考えは伊藤隆二の考えと通底し、同じ地平に立つ「主体」同士、「人間」同士が、互いに「最も小さい者」として語り合い、関わり合い、補い合い、助け合い、それぞれが「自分として」生き生きと、その「生」を全うする前提となるものである。

## 2.3 「弱さの力」

金光： その弱いから強いという。これは常識の世界ではそんなことかと思うんですけども、ちゃんと聖書の中にはそういう言葉を発表されているところがあるわけですね。

主が言われた、「わたしの恵みは  
あなたに対して十分である。

わたしの力は弱いところに完全にあらわれる。」

「弱いところに完全にあらわれる」ということをおっしゃっていますね。

それだから、キリストの力が  
わたしに<sup>やど</sup>宿るように、  
むしろ喜んで自分の弱さを誇ろう。

.....

わたしが弱い時にこそ、  
わたしは強いからである。

(コリント人への第二の手紙 十二章 九から十節)

「わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである」というのは、またほんとうに<sup>すご</sup>凄い言葉ですね。

**伊藤**：そうですね。よく「発想の逆転」なんてことを言いますが、キリストの<sup>みことば</sup>御言葉というのは、実は  
〈この世の私達が住んでいる、この世の<sup>ある</sup>発想、或いは<sup>みこと</sup>価値観というものを見事にひっくりかえした〉ところに  
〈真理がある〉ということですね。〈本当の生き方がある〉んだということを教えて下さっているわけなので、  
〈弱い時にこそ、私は強い〉ということですね。それで実は私自身も身体が大変弱かったものですから、この  
御言葉、非常に私にとっては励みになるんですね。 [伊藤・金光 1996, pp.6-7]

<sup>まさ</sup>正に伊藤が述べるように「発想の逆転」である。通常の社会の価値観では「強い者」が人を助けると考える。しかし、それは逆で「弱い者」が人を助ける。<sup>ふくいん</sup>福音(The Gospel)の価値観は通常の価値観とは異なるのである。神の力を受け、人を生かすのは「弱い人」である。「弱い人」は他人の悲しみ・苦しみ・痛み・孤独・<sup>くや</sup>悔しさ・怒りがわかる。そうだからこそ人を真に<sup>こぶ</sup>励まし鼓舞することができる。再び立ち上がる力を人に与えることができる。「弱い人」＝「最も小さい者」＝「この子ら」の視点まで<sup>さ</sup>下がって、その生き方を学ぶ時、真の相互理解と救済・解放が、この世に出現する。我々は<sup>こうべ</sup>頭を垂れ<sup>た</sup>神の使徒である「この子ら」から<sup>しんじ</sup>真摯に学ぶことが重要であると伊藤隆二は主張しているのである。

## 2.4 「世の光」

**金光**：有名なヨハネによる福音書に出て、例の盲人の方に対する言葉ですね。ちょっと<sup>いただ</sup>読まして頂きますと、

「この人が生まれつき盲人なのは、  
だれが<sup>おか</sup>罪を犯したためですか。」

本人ですか。それともその両親ですか」。  
イエスは答えられた。  
「本人が罪を犯したのでもなく、  
また、その両親が犯したのでもない。  
ただ神のみわがが、彼の上に現れるためである。  
わたしたちは、わたしをつかわされたかたのわざを、  
昼の<sup>あいだ</sup>間にしなければならぬ。  
夜が来る。すると、だれも働けなくなる。  
わたしは、この世にいる間は、世の光である」。  
(ヨハネによる福音書 九章 二から五節)

これはヨハネによる福音書の九章にある言葉でございますが、

**伊藤**：有名な御言葉ですね。ここで非常に明確に示されているのは、本人のせいでもないし、<sup>もちろん</sup>勿論、両親のせいでもない。こういう状態になっているのは、その神の<sup>みわざ</sup>御業であるということなんですね。でその上で、私<sup>わが</sup>達がその業を行わないといけないんだという意味のことも書いてあるわけですね。

**金光**：私達はで、私ではないんですね。

**伊藤**：そうなんですね。〈このキリスト、一人じゃない〉ということなんですね。要するに、〈この世の人達が皆〉という意味なんですね。それは〈その目の<sup>くも</sup>曇りを取って、正しくそのものごとを見抜いた人達〉。で〈そのことを神は期待しているんだ〉という意味だと思っただけですね。これは、その後「昼の間にしなければならぬ」ということが書かれておりますけれども、夜は悪魔というか、サタンの活躍する舞台ですね。でそのサタンの働きを弱める<sup>ため</sup>に、「昼こういうことを我々はしなければいけなんだ」と。「その為に私はこの世に来たのだ」と。で「世の光なのだ」ということをおっしゃっているわけですね。この御言葉、私、非常に重要だと思っただけですね。私達は弱い人、強い人に対して、〈強い人は善〉で、〈弱いのは悪だ〉とかですね。或いは〈業績を上げた人は善〉で、〈そうでない人は悪〉だというような<sup>とら</sup>え方をしているんですが、〈実はそうでない〉ということですね。ここでは盲人と言っておりますけれども、何らかの意味で弱いところがある人達ですね。そのことを代表させているんだと思っただけですが、〈弱い人達の中に本当の生き方をしているものがある〉ということ<sup>くだ</sup>をキリストは教えて下さっているんだらうと思っただけですね。 [伊藤・金光 1996, pp.5-6]

上の聖書の例では「盲人」(視覚ハンディキャップのある人)が挙げられているが、それは偶然ではない。「見えない人が<sup>よ</sup>善く見える」という福音の逆説である。見えない人は眼では光は見えない。しかし、光を眼が見える人より感じることができる。世の光とはイエス＝キリストであり、その光を正しく受け止めることができるのは「この目が見えない人」なのである。したがって、そのような人は神の御業の地上での協力者であり、つまり自身が「世の光」なのである。「正しく見る力」と

は、言うまでもなく知的な力ではない。神が与える光を素直に、そのままに受け容れる心をもった人たちとは「弱い人」＝「最も小さい者」＝「この子ら」であり、これが伊藤隆二が主張する「この子らは世の光なり」の背景にある考え方である(伊藤 1988・1990b・1995)。

## 2.5 「特別の目的」＝「啓発」

**伊藤**：<sup>さきほど</sup>先程、「障害児」という言葉、「障害者」という言葉ということは、よくないと言ったんですが、この子供達の方が、むしろ障害されているという面が非常に強いのではないかと、私なんか思うんですね。パール・バックさんの話を、<sup>さきほど</sup>先程申し上げたんですが、最終的に自分のところに、その知的能力にハンディを<sup>お</sup>負った子供が生まれたと。〈その子供の役割は何だろうか〉と、彼女は非常に熱心に考えたようですね。その結論として、〈ああ、この子供は特別な目的があつて、この世にもたらされたんだ〉という。最終的に、その発見をしまし<sup>て</sup>ですね。同じ様な子供さんをお持ちのご両親に向かってですね、「頭を真っ直ぐに上げて、堂々と歩きなさい」と。「あなた達の子供が、むしろ世の光として、この暗い<sup>ゆづ</sup>行き詰まってしまっている世の中を<sup>て</sup>照らしてくれているじゃないか」という。そういう意味のことをこう書いておられるんですよ。

**金光**： その言葉をちょっと読まして頂きます。

この子らはみな彼ら独特の目的をもっています。

世の親たちよ、<sup>は</sup>恥じることはない！  
絶望してはいけません。

その子は自分と世の他の多くの子供たちのために、  
たしかに特別の目的をもっているものです。

.....

頭をあげて指示された道へ進まねばなりません。

(パール・バック)

特別の目的を持っているんだと。<sup>うつむ</sup>俯いてじゃないと。頭を上げて歩きなさいと。

**伊藤**： そういうことなんですね。「指示された道」とこう書いてありますが、これは文字通り〈真理の道〉です。ほんとに〈正しい道〉というのは、〈その道〉なんだと。〈現代人はその道を間違っている〉と、<sup>ある</sup>或いは〈確認出来ないでいる〉んだということ。〔伊藤・金光 1996, pp.11-12〕

上の「特別な目的」とは何のことだろう。それは一言で言えば「この子ら」が「世の光」として灰色の雲に<sup>おほ</sup>蔽われた「この世」を照らし、我々の曇った眼を開かせ、「真理の道」を指し示すことであろう。<sup>しずか</sup>静(1993)は光の働きを「照らす、暖める、燃やす、<sup>きよ</sup>浄める」(静 1993, p.22)にまとめている。この考え方を<sup>ふえん</sup>敷衍して「特別な目的」を考察すれば次のようになる。

「照らす」には人々の見える高いところに置かれる必要がある。「この子ら」を社会の片隅に置くのではなく、中央の高いところに置くのである。それによって、この世界の闇を明るく照らし、この世で生きる人、「この子ら」の光によって曇った眼が開かれた人の苦悩をやさしく包み込む。「暖める」とは何を暖めるのか。曇った眼が開かれた人の冷たくなった心を温め、消えそうであった希望を暖める。この世の冷め切った愛をもう一度暖める。「燃やす」とは何を燃やすのか。この世は妬みや怒りや憎しみの火で燃えている。その火で傷つき立ち上がれない人が無数にいる。その人たちを無限大の愛の火、つまりは神の愛＝アガペ(Agape)＝無償の愛＝献身の愛の炎の中に包み込み、すべてを「この子ら」の生き方に倣うことである。「浄める」とは何を浄めるのか。アガペの火はすべての悪と罪、過誤を燃やし尽くし、この世を浄める。それは同時に我々の心の中も浄化する。悪と罪に塗れた古い自分は死に新しい自分として生まれ変わるのである。

このように考えてくると「この子らは世の光である」ことは明白になり、その「特別な目的」とは我々への「啓発」と言えないだろうか。このことに関して伊藤隆二は次のように述べている。

この子らは、戦争を始めることも、それに参加することもしない。それどころか、自分の利得のために他者と競うこともしない。他者を騙し、ずるく振る舞うことをしない。自然を破壊し、環境を汚染することもしない。純粹で、真心いっぱい生きています。どこまでも実直である。そして清らかである。この子らは、(たとえ、言葉が話せないほど、知力に重いハンディキャップを負っていても) その飾らない生き方のままで、すべての人に、「どう生きるのが正しいか」を教えている。

この子らに教えられ、導かれ、この子らに赦され、癒され、浄められる人は、現代の社会では多いのだ。争いのない、誰もが助け合い、補い合い、誰もが楽しく、それぞれ生きがいをもって、生き生きと生きていける世の中は、この子らが光りであるから実現するのである。この世に光を送り、何もかも明るく照らし、安らぎとぬくもりと夢と希望を与えてくれるのはこの子らである。

英語で「啓発」を「エンライトenment(enlightenment)」というが、これは「光を灯して教え導くこと」を意味する。その役割を担っているのがこの子らであることははっきりしている。それゆえにこの子らは「啓発児」と呼ばれるのが相応しい。〔伊藤 1995, pp.180-181〕

## おわりに—まとめに代えて—

本稿では1990年に発表された伊藤隆二教授の論文『『障害児』から『啓発児』へ—今まさに転回するとき—』を中心に考察した。その結果、「この子ら」は「障害児」ではなく「啓発児」であることが明らかになった。「弱い者」である「この子ら」が特に啓発する人々は一般の人々よりも強い人々である。自分の家柄や地位や財産や名誉を誇る「強い者」である。このような「強い者」は眼が曇っていて正しくものが見られない。しかし「強い者」の内、目覚めた人たちは、「弱い者」である「こ

の子ら」の放つ「光」によって曇った眼が晴れ渡る。その「光」は視点を低きに転換する力があり、そのことにより、地上にいるすべての人が互いに理解し、<sup>たす</sup>扶け合い、<sup>おぎな</sup>補い合う社会の実現可能性が開けてくる。正に「この子らは世の光なり」(伊藤隆二)なのである。したがって「障害児」という言葉は存在する意味を失い、「この子ら」を呼ぶとすれば、普段は<sup>おのおの</sup>各々の名前で呼ぶことは当然として、「この子ら」を<sup>あ</sup>敢えてまとめて表現しなければならない時は「啓発児」と呼ぶのが相応しい。以上が、伊藤隆二が発表された論文を検討した結果、明らかになった事柄である。

なお今後の課題であるが、次の 4 点の論文の発表を予定している。

1. 1992 年の「精神薄弱」用語問題：『発達障害研究』(日本精神薄弱研究協会)1992 年第 14 巻第 1 号の検討考察。
2. 1992 年の「精神薄弱」用語問題：『AIGO』(日本精神薄弱者愛護協会)1992 年第 39 巻第 5 号から第 7 号の検討・考察。
3. 1992 年の「精神薄弱」用語問題：『発達の遅れと教育』(全日本特殊教育研究連盟)1992 年第 415 号の検討・考察。
4. 1992 年の「精神薄弱」用語問題：1992 年以降の動向、二つの「法律」から。

以上のことを通じて、伊藤教授が主張される、なぜ「この子らは世の光なり」なのか、また、なぜ「障害児」ではなく「啓発児」なのか、ということをも更に深めて考えていきたい。

## 【引用文献】

- 有馬正高[話し手]・原仁[聴き手]・池田由紀江[聴き手](2010)「日本発達障害学会設立 50 周年記念プログラム『名誉会員に聴く』鼎談 有馬正高氏に聴く」『発達障害研究』(日本発達障害学会)32(5), pp.471-485。
- 藤本隆・松岡廣路・奥秋克海(2010)「この人に聞く 藤本隆先生『誕生日ありがとう運動』で福祉問題を考え、実践に学んだこと」『ふくしと教育』(日本福祉教育・ボランティア学習学会) 8, pp.48-51。
- 本田哲郎(2001)『小さくされた人々のための福音—四福音書および使徒言行録—』新世社。
- 本田哲郎(2006)『釜ヶ崎と福音—神は貧しく小さくされた者と共に—』岩波書店。
- 伊藤隆二(1988)『この子らは世の光なり—親と子と教師のための生きることを考える本—』樹心社。
- 伊藤隆二(1990a)『「障害児」から『啓発児』へ—今まさに転回のとき—』『誕生日ありがとう運動のしおり』増刊 101 号, pp.1-5 [<http://www.maroon.dti.ne.jp/okuguchi/yougo.htm> に転載のものから引用]。
- 伊藤隆二(1990b)『なぜ「この子らは世の光なり」か—真実の人生を生きるために—』樹心社。
- 伊藤隆二(1995)『この子らに詫びる—「障害児」と呼ぶのはやめよう—』樹心社。
- 伊藤隆二[話し手]・金光寿郎[聞き手](1996)「この子らに啓発されて」(逐語録) NHK 教育テレビ『このころの時代～宗教・人生～』(平成 8 年[1996 年]4 月 7 日放送), pp.1-13 [<http://h-kishi.sakura.ne.jp/kokoro-147.htm> を A4 用紙にプリントアウトして頁数を付け引用]。
- 岩井美奈(1999)「精神薄弱の用語の整理のための関係法律の一部を改正する法律」『法令解説資料総覧』 211, pp.61-65。
- 大熊由紀子(1992)「心ない福祉用語の改革が始まった」『社会福祉研究』(鉄道弘済会 社会福祉部) 55,



鶴田一郎：1992年の「精神薄弱」用語問題：  
議論の端緒・伊藤隆二(1990)『『障害児』から『啓発児』へ—今まさに転回するとき—』を中心に

pp.105-107。

静一志(1993)『地の塩と世の光—イエス様のたとえ話—』聖母の騎士社。

滝澤武人(1997)『人間イエス』講談社。